

編集後記

◆「展景」同人だった鈴木京子さんのエッセイが冊子として出来上がった。別プロジェクトとして、はやばやと印刷の見通しが立ったのはありがたかった。協賛してくれた方々に感謝申し上げます。

◆新庄は、山形県内でも雪の多いところである。新庄市に旧農林省「積雪地方農村経済調査所」（以下「雪調」）の庁舎の一部を保存・復元したのがあることを知った（「gatta」（フリーマガジン・ガッタ）二〇一七年二月号）。昭和十二年、民俗学研究者で民家の研究をした今和次郎により設計・建築されたトングリ屋根の庁舎は「克雪」を考えてデザインされていて、今も魅力的に映る。その発端は、昭和初期に「雪は災害なり（雪害）」と唱え、雪害克服運動を積極的に展開した松岡俊三代議士（一八八〇〜一九五五）にある。運動が実って「雪調」が設置されると、東畑精一や中谷吉郎、柳宗悦など、錚々たるメンバーが集められ、さらに冬期の仕事を生み出すため、陶芸家・濱田庄司、染色工芸家・芹沢銈介、建築家・ブルーノ・タウトなども関わっていく。画期的な「雪調」の取り組みだったが、戦争が始まり日本全体が戦時体制になっていくと活動は停滞していったという。詳しくは「gatta」のウェブサイトを見てほしいが、この動きが続いていけば今の雪国の農村はどうだったかと思わずにはいられない。📧 <http://www.okazegatta.jp/feature/2544>

◆「風変わったところがあった。「展景」を主宰していた布宮みつこのことである。みつこは私の叔母（父の妹）にあたる。叔母は小さいころから体が弱く、大人になってからも漢方や民間療法、腹式呼吸、自強術など、体にいいとされるものはすべて体験していたのではないか。教師を続けられなかったのも、立ち仕事がつらいという理由だった。東京に出て編集の仕事についたときは、座ってできる仕事がある！と思ったそうである。もうひとつ、人生の岐路に立ったとき古いや姓名判断に頼ることがあった。もちろん信頼できると思った人に意見をきくわけだが、それだけ悩みが深かったのかもしれない。

私の「慈子」という名はペンネームである。「安子」がもともとの名前。親が付けてくれた名前に、いい悪いもない。が、私が小学生のころ、叔母に「名前をひらがなで書いたほうがいい」と言われた。画数に難あり、ということだった。ふーん。おばちゃんの言うことだからそうするか、くらいに思っていた。いま考えれば、二歳で父親と死別した私を案じてのことだったろう。さらに、私の人生に激動が訪れたとき、叔母は巢鴨に連れていった。たしか地藏通りにある家だった。その家の二階に上がっていくと、年配の婦人がいて、その人に生年月日や名前を書いて渡したのだと思う。なにやら資料に当たってしばらくすると「愛」と「慈」の漢字が示された。どちらも「やす」という読み方があるらしい。私は「慈」を選んだ。その場で決まったのが「慈子」。とにかく仕事運はあるという。三人でちよつと笑った。ふーん、そんなものかと少しさめていたが、「きょうから自分の名前だと思えるまでノートに何回も書くように」と言われて帰ってきた。せっかく叔母が骨を折ってくれたのだからと、私はその名前を使うことにした。三十数年前の話である。そのお陰かどうかはわからないが、当面の仕事は見つかり、その後も仕事を続けることができて、なんとか生き延びてきた。人にも恵まれた。もしかしたら、ほんとうに運のいい名前だったのかも！叔母が亡くなってから十二年になる。これからも、ありがたくこの名前を使わせてもらおうことにしよう。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊 展景 85号

二〇一七年三月十二日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一―一七―二〇一

info@muninokai.com